

【短報】オニヒラタシデムシの九州における追加記録

オニヒラタシデムシ *Thanatophilus rugosus* (Linnaeus, 1761) は、日本国内において本州、四国、九州に生息し、九州での記録は、福岡県、宮崎県から記録されているが(日下部, 1987), 確認されることが比較的少ない種である。本種は一般的に平地から低山地の河川敷に生息することがよく知られているが、ときに標高 1,500 m を超える山地でも確認されるなど生態面で不明な点もある種である(須田ほか, 2014)。今回、河川敷とは異なる環境において、以下のように本種を確認しているので報告する。

2♂♂, 3♀♀, 大分県竹田町祖母山(山頂付近, 標高 1,750 m), 23. VII. 2019. 足立採集・足立, 日下部保管。

いずれの個体も午前 10 ~ 12 時頃を中心に山頂付近を他の昆虫類に混じり飛翔していた個体である。採集した個体以外にも複数の飛翔個体を目撃している。確認場所の山頂付近で発生しているのか、あるいは山麓部から上昇気流に乗って飛来したのかは不明であるが、高標高地で複数個体が確認されたことは興味深い。

末筆ではあるが、本種の群馬県での確認状況などをご教示して頂いた堀口徹氏(群馬県)にお礼申し上げます。



図 1. 九州(祖母山)産オニヒラタシデムシ(左:♂;右:♀)。

引用文献

日下部良康, 1987. 九州におけるオニヒラタシデムシの記録. 月刊むし, (202): 26.
須田 亨・堀口 徹, 2014. 群馬県のシデムシ. 乱舞, 群馬昆虫学会, (20): 7-18.

(足立一夫 811-1354 福岡市南区大平寺 1-47-10-107)

(日下部良康 224-0013 横浜市都筑区すみれが丘 21-12)

【短報】石川県におけるタマキノコムシ亜科 2 種の初記録

石川県におけるタマキノコムシ亜科については渡部・保科(2018)がチェックリストを作成しており、30種が報告されている。渡部が石川県内で採集した個体を保科が同定した結果、石川県初記録となるタマキノコムシ亜科 2種が確認されたので報告する。本報告により、石川県から記録された本亜科の種は 32種となる。

報告に先立ち、一部の採集にご同行いただいた石川県ふれあい昆虫館の福富宏和氏にお礼申し上げる。

ツヤマルタマキノコムシ *Agathidium (Agathidium) sublaevigatum* Portevin, 1908

1♀, 石川県白山市尾添楽々新道, 22. V. 2019, 渡部採集・保科保管(図 1)。

本種は久松(1985)の掲載種なので、各地の目録によくリストアップされている。しかし、久松(1985)に記述された「上翅はほぼ無点刻で会合部小溝を欠く」との形態的特徴はマルタマキノコムシ属(*Agathidium* 属)に普通に見られるものであり、種の識別には全く使えない形質である。各地の目録に登場するツヤマルタマキノコムシは別種が混在している可能性が高い。

ツノマルタマキノコムシ *Agathidium (Neoceble) cornutum* Portevin, 1927

1♂, 白山市桑島大嵐山, 17. VII. 2019, 渡部採集・保科保管(図 2)。

本種の記録は各地の分布記録に登場し、久松(1985)は本州と九州に分布すると記述している。一方で、保科(2000)は九州産の記録はヤマオカオモゴマルタマキノコムシ *Agathidium (Neoceble) omogoense yamaokai* Hoshina, 2000, 本州(関西～関東地方)の記録はギオンマルタマキノコムシ *A. (N.) funereum* Angelini et De Marzo, 1990 の誤同定である可能性が高いことを指摘した。九州の *Neoceble* 亜属について分類学的検討がなされた Hoshina(2000)でも本種は扱われていない。したがって、国内において本種と正確に同定された記録は Portevin(1927)が記載した信州産(*Kumanotaira*)のタイプ標本以外に存在しない可能性が高い。

ツノマルタマキノコムシのホロタイプの採集者はガロアムシに名を残すガロアである。ただ、本種の原因記載の Portevin(1927)の標本データには採